



# 幸せの隠れ家

永田円了

*Happiness Only Real When Shared*

“幸せ”がテーマである。その幸せを決める客観的な基準は、残念ながら存在しない。それは各人の心が決めることだからである。他の動物では、本能はDNAに書き込まれているので、考えなくとも生きて行ける。しかし人間は他の動物と違って、本能のおもむくままには行動できない。いやむしろ人間は本能が壊れていると言えるかもしれない。これが不幸の始まりなのか（フロイト）。今回は、このつかみ所のない”幸せ”を4つの視点から明らかにしたい。

## 文学の視点： 幸せとは、「紆余曲折の人生の後に訪れる悟り」

江戸時代の文芸作品『好色一代男』（井原西鶴の処女作）で語られている主人公・世之介、酒池肉林をとことん追求する。しかし、ひとときの享樂はそう簡単には人を幸せには導かない。また『好色一代女』では、女性の流転の人生が描かれる。とことん落ちた後に訪れる魂の解放。それぞれの紆余曲折の人生、その後に感じ取る悟りにも似た心境、これを文学的見地から観た幸せとみる。

## 経済学の視点： 幸せとは、「ひとの痛みが分かること」



アダム・スミスの『国富論』では、自由な経済活動をすれば、幸せはもたらされる、とある。しかしながら、いま自由経済に生きている私たちは、なぜ幸せとは言えない様々な問題をかかえているのだろうか；ブラック企業、ワーキングプア、非正規雇用など。

アダム・スミスの真の考察は、『国富論』の17年前に書かれた『道徳感情論』The Theory of Moral Sentiments にさかのぼる。

アダム・スミス曰く、「人間がどんなに利己的なものであったにせよ、われわれが他の人の悲しみを想像することによって、自分も悲しくなるのは、あきらかである」。この共感力が良心を呼び起こし、フェアプレイの社会が造られる、というのである。

## 哲学の視点： 幸せとは、「本物を求め、辿り着く普遍性の世界」

人類の歴史は、個人が自由を自覚してゆく歴史、つまり自由イコール幸せであった。しかし、その自由には危ういところがある。自由を追求するとひとは孤独になり、孤独になると、生きる意味が分からなくなるのである（ヘーゲル）。

人がなんと言おうが、オレはこの方向へ行く、と言ったとき、他者からの承認は犠牲にしなければならない。つまり自由と承認欲求はぶつかり合うのである。さて、2つの欲求を満たす道はあるのか、ある。自由に行うことの内容に普遍性をもつことである。つまり、本物を求めること。本物は時代も文化も越えて、誰しもが承認するものだからである。



## 心理学の視点： 幸せとは、「分かち合ったときに生まれる心境」

「人間はなんのために生きる」「人間は自分のためだけに生きることに卑しいものを感じる」「自分のためだけに生きて、自分のためだけに死ぬほど人間は強くない」。

三島由紀夫のコトバで語られるように、私たちが心を動かされるものは、なにか自分を越えたもの、を感じたときであろう。それは、**他者との繋がりの中でつかみ取るものであり、ただ一人で自由に自分の好きなことをして楽しむことでは得ることはできない。**

### <事例 DVD等>

100分 de 幸福論/Eテレ 2016/3/13  
井原西鶴原作「好色一代男」「好色一代女」  
坂東玉三郎/落ちる美学/魂がどこか下へ行く  
精神科医・加賀乙彦/神が悪魔をつくた  
作家・小川国夫/母の抱擁、高尚な真理、同じ幸せ  
映画『幸せの隠れ場所』/サンドラ・ブロック  
映画『Into The Wild』/Happiness Only Real When Shared  
棟方志功/自由と普遍性を満足させる  
三島由紀夫/死を生る前提としての幸せ感  
歌・You've Got A Friend/ キャロル・キング&J. Taylor

